

繪本三國妖婦傳

中編
三

13
2892
8



門へ 13
2892
8

三國文書口

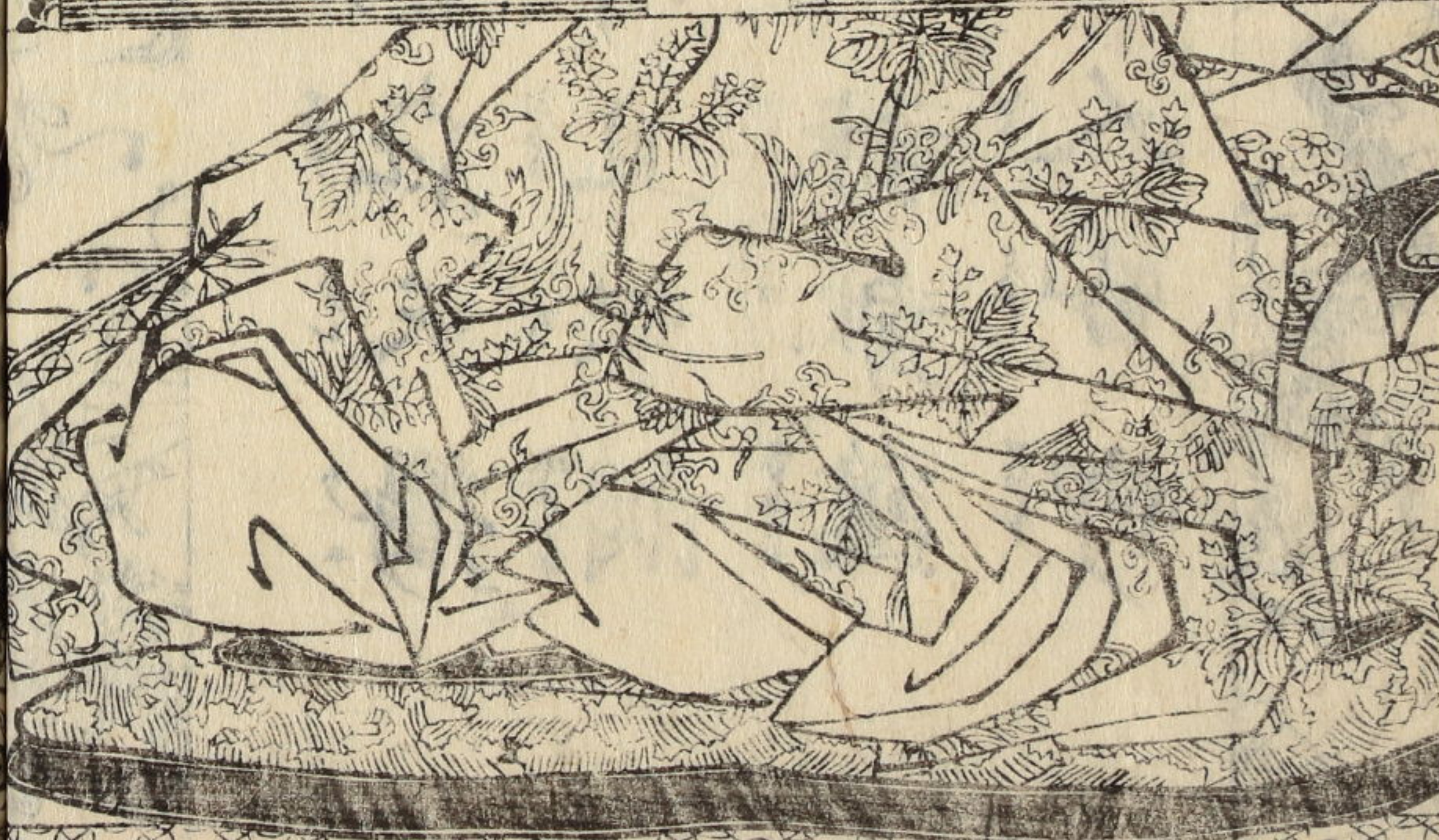
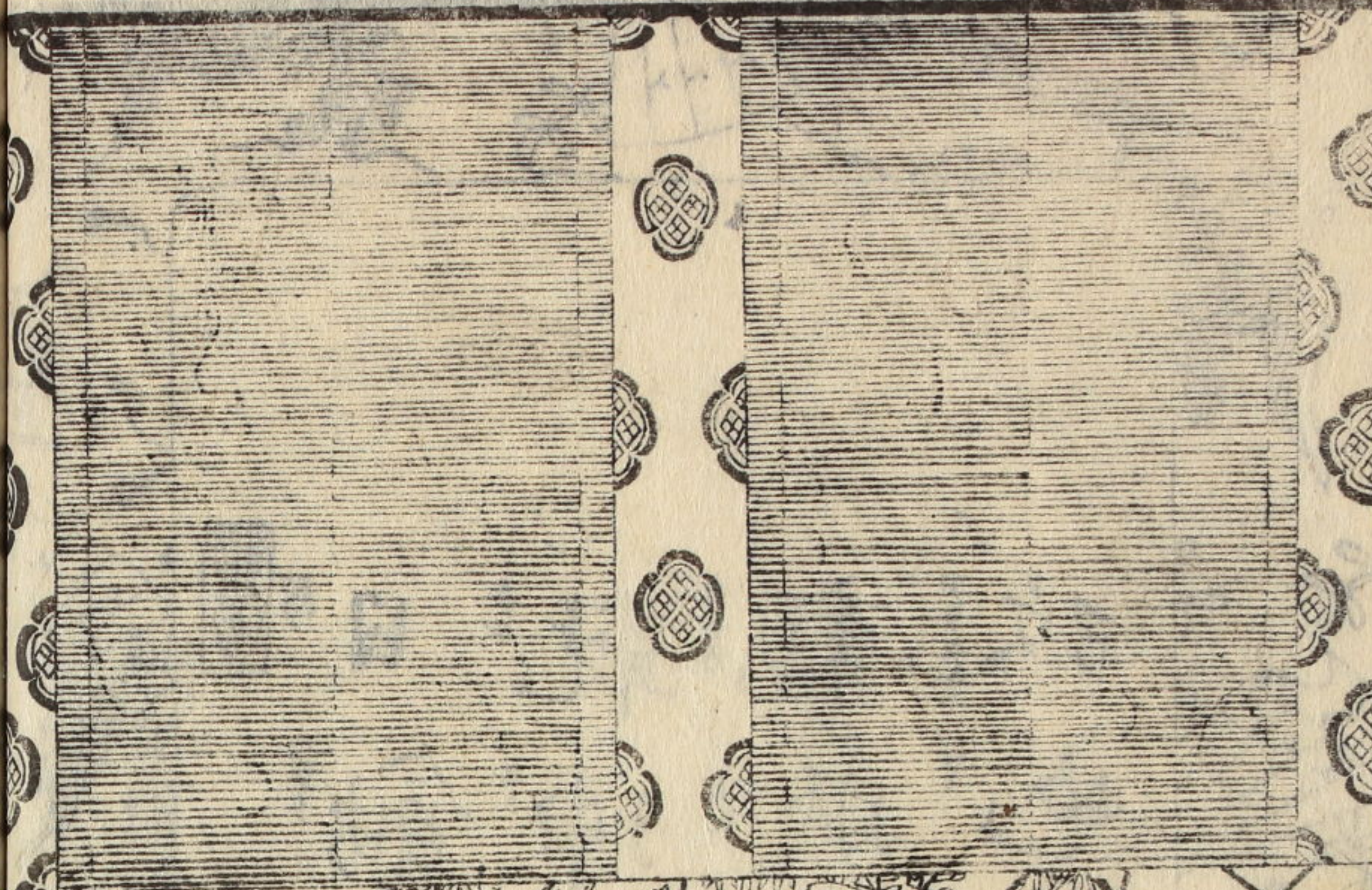
改也人皆仰
龍既諫敢薦
乾坤且不朗
日蝕在天嚮

昭和九年三月廿四日

タマモエノマエ
玉乃澡敷



玉乃澡敷



玉乃澡敷

唐

書

恩^{ヲハ}深^{フカシ}傾^{ウレ}國^{コク}色^{イロ}
 閨^{ケイ}裏^リ夜^ヤ光^{クワ}珠^{タマ}
 忽^{タチマナ}變^{ヒメ}一^{ヒト}塊^{クワイ}石^{イシ}
 萬^{マン}年^{ネン}寒^{サムカラシム}丈^{ヤウ}丈^{ヤウ}
 右^{ミチ}字^ジ不^フ款^{クワン} 高^{タカ}伴^{バン}寬^{カン}四^シ圓^{エン}

繪本三國妖婦傳中編卷之三
 目錄

褒姒^{ハウシ}周^{シュウ}の幽^ウ二^ニ以^{ヨリ}昏^{コン}惑^{ダク}せしむ^ル義^ギ大^{ダイ}戎^{ジュウ}の五^ゴ幽^ウ王^{オウ}を殺^{ころ}す

幽^ウ五^ゴ烽^{フウ}火^カを罌^ウ中^{チュウ}に燃^もゆ^ル褒^{ハウ}姒^シの戲^{ウケ}の圖^ズ

大^{ダイ}戎^{ジュウ}周^{シュウ}の都^ト城^{シヨウ}に乱^{ラン}入^{ニル}の圖^ズ

伯^{ハク}服^{フク}美^ミ女^メと化^カし跡^{アト}以^{ヨリ}暗^{カク}す圖^ズ

仲磨の亡靈吉備大臣及佑孫野馬臺の文と讀

遣唐使渡海の圖

仲磨唐に在て和歌詠とる圖

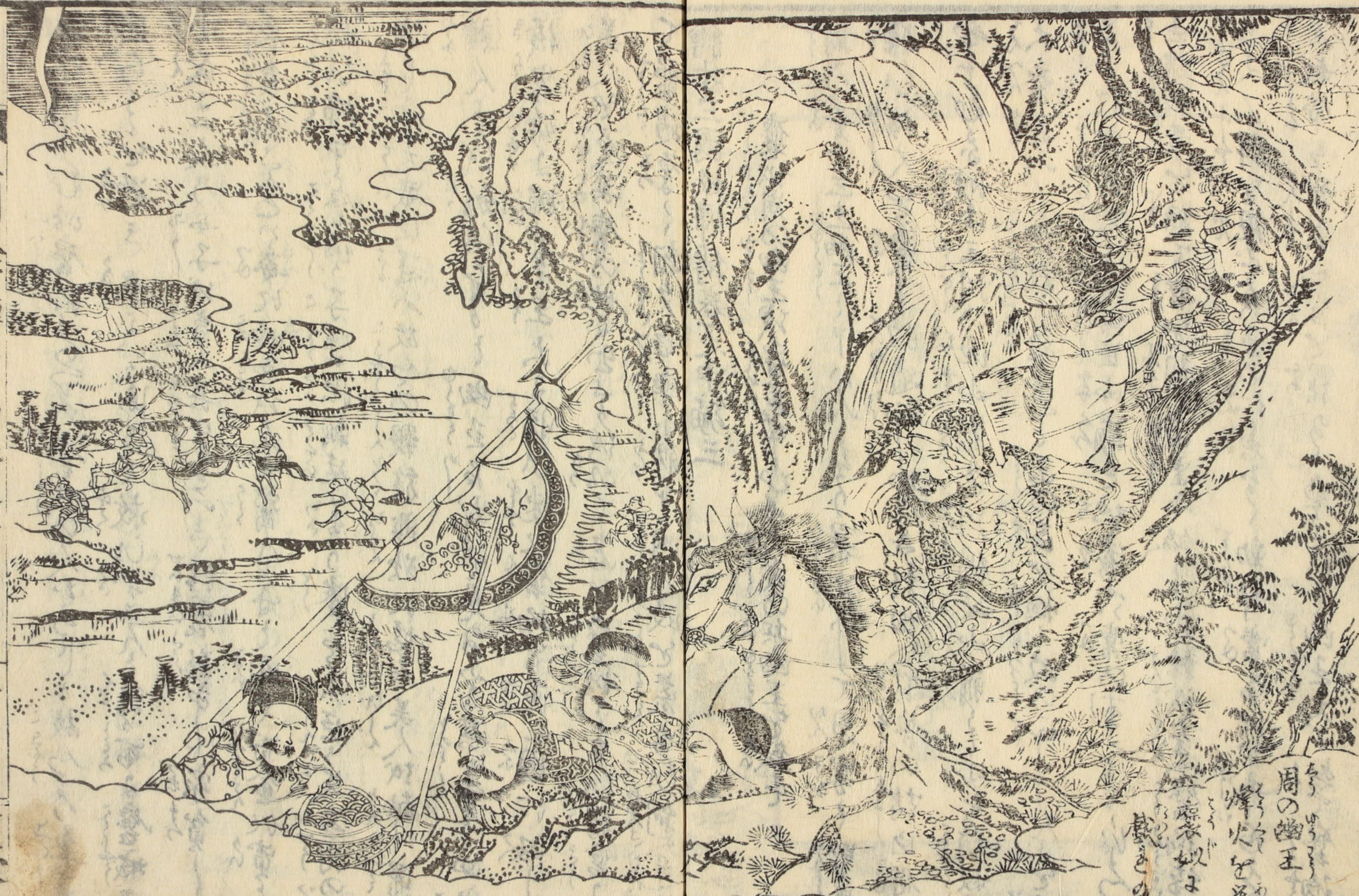
日本の吉備大臣唐の張浚と其攻圍の圖

吉備大臣野馬臺の文と讀圖

繪本三國女婦傳卷之中編三

褒姒周の幽王浅昏蓋中し其大戎の兵幽王を殺と

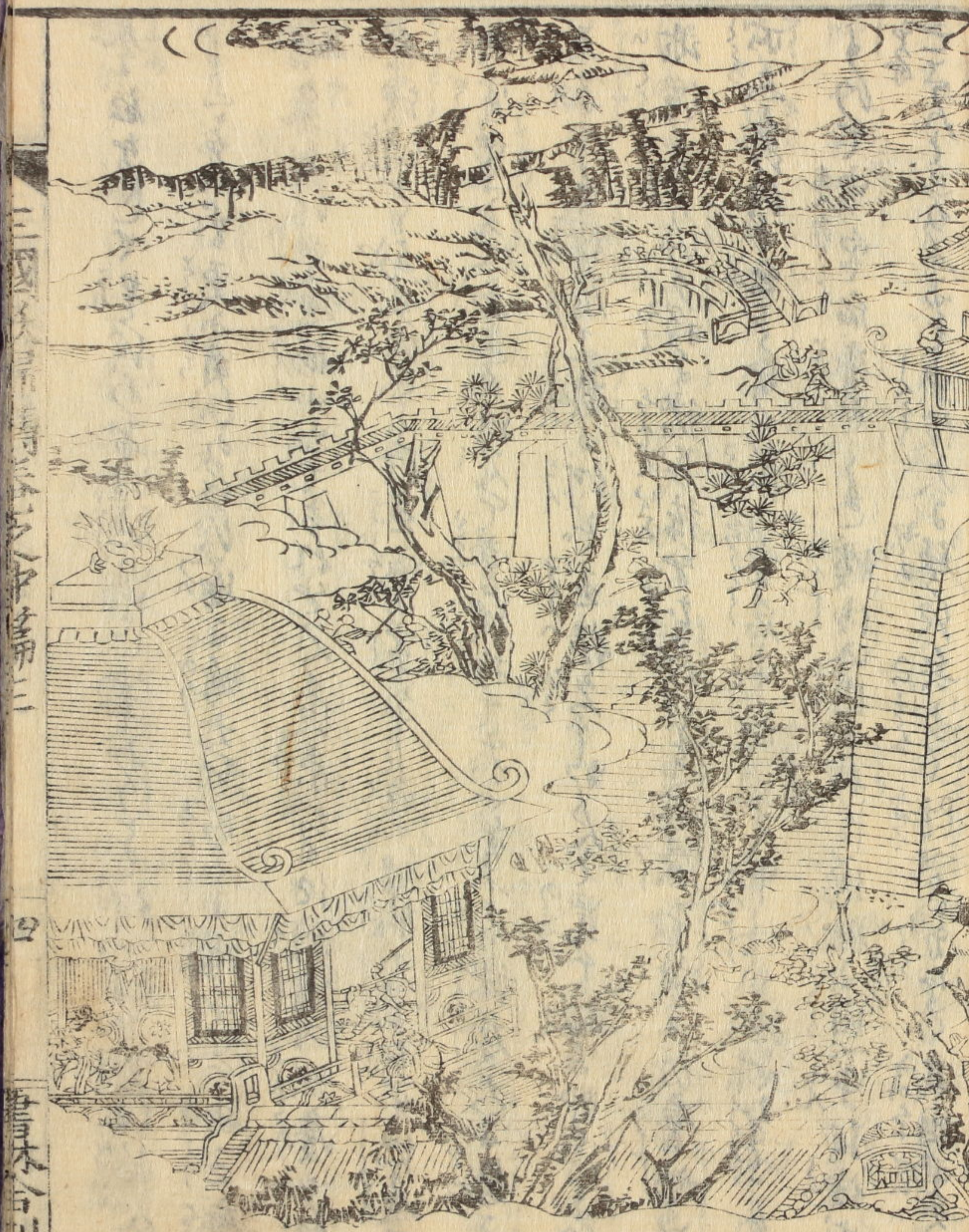
周乃第十三主幽王とヤハ人とをり暴虐かして恩寡く賢臣を
嫌ひ佞人を愛し改道中かきおとす賢臣の諸臣周浅
をさむる時小三川の地山崩は川湯岐山崩しゆを諸叔帯
天愛おつてくハ乱の兆しと王の民を恤し改の中一人を妹
をり以親石父と名佞臣山崩を地震の常の事としてしよて
五諸叔帯を怒て官を削て田里小缺しむ諫諍を更察珣珣を
云天不祥を現ぶるハ玉の仁あるを勳靜常を以て戒めゆえん
且叔帯を賢者也官を削るハ玉の仁あるを勳靜常を以て戒めゆえん



周の幽王
烽火を奉
獻す
圖

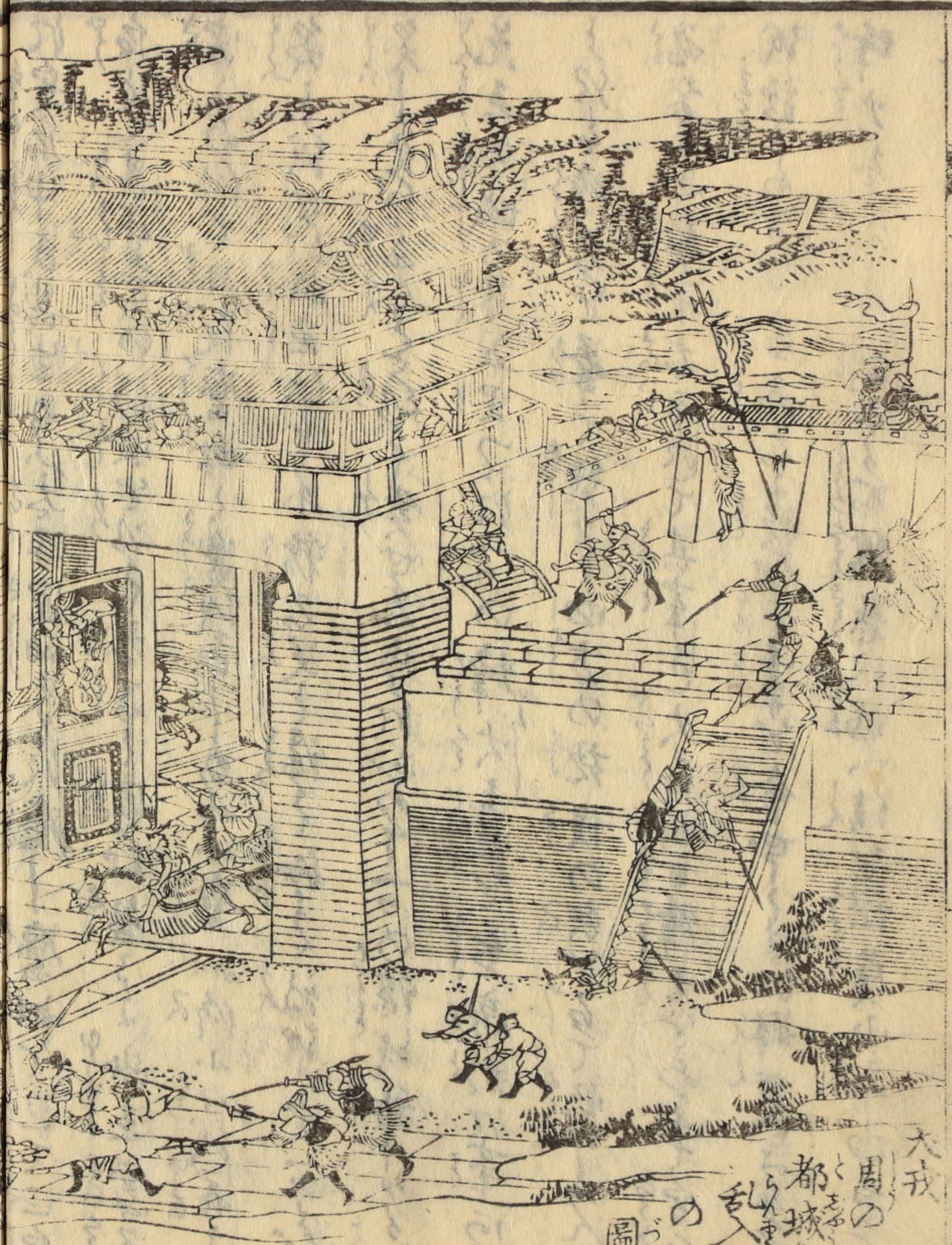
小國に此處城の人の故の妻子を
 囚らざるを救ふに海に逃げて救はれんと欲す而も魯城乃
 小民一人の女子以育入其生をいつる法を教ふ一室を以て
 衣食足るは毎に此女其人を驚んとすと聞て百金に賞をり
 給ひ婦人子魯洪朝廷は重り慶らるる臣が父を無用の祿
 故に天威に達ふ故の親族逃れに地を美人に献じ罪を
 贖んと欲せしむると幽王召して見せしむ其年十四歳
 儀容嬌媚を王大は悦ひ速に魯城を免し國に返し
 美人を更其魯の地に出さず以て名を慶姫と名し海宮に入
 て寵遇厚く朝夕嬉樂小耽甲國の政を荒らし刑罰を
 亂し其生をのふ太子宜白と名し慶姫を以て正室
 宮にありて日夜慶姫と樂みあはるる魯城は小は城家
 知れず其口は幽王にす不務る父と稱し海に逃れしを
 笑し其の命を以て賞せんあるに其の二つの儀法神に
 先王魯城の外五里つに一つの烽火臺を帝於に奉り
 とはる烽火を奉りて四方の諸侯の兵を召て救めんが
 為あり小魯奉た手にて其事は大王明日烽火をわきて魯
 城を告ぐるに幽王は悦び其事を命じて群臣に告ぐ
 烽火を先王の制するに復急に備へ信を諸侯小魯に告ぐ

三國史記 卷之三十三 三



三國女嬃作

大我



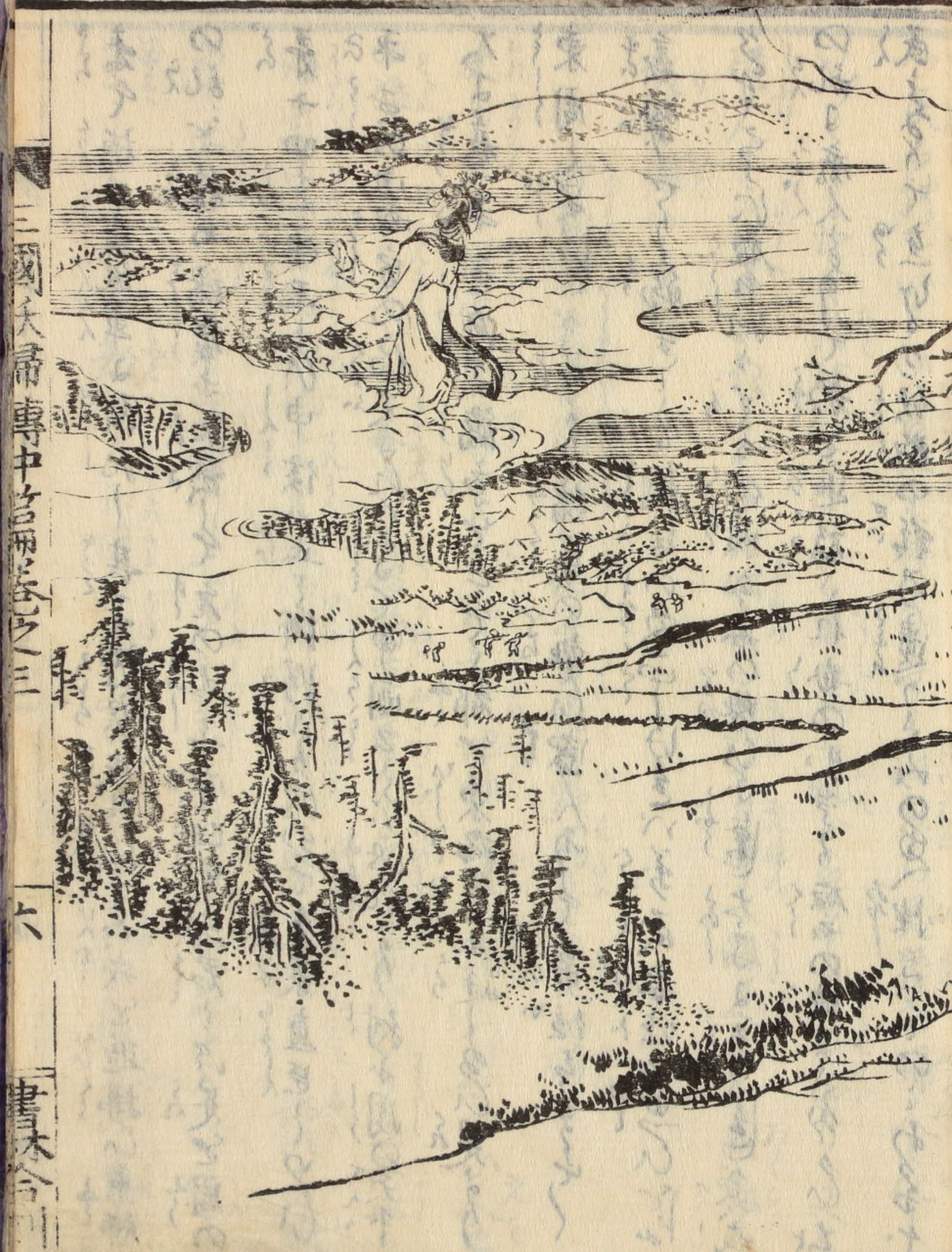
三國女嬃作

大我

周の都の乱の圖

今おきて是頃わが他国に事ありとも何とみて急須極令
 了とせんも更小用いぬの以て遂は將士を而くは揚るをて幽王廢
 ぬるに望望極小おとあれとるに京ちりけ別國の諸侯これ
 兵引くをゆくにこれ王城小事あり廢極極よまを諸侯の
 兵直せんに多き城入て堂城極て大小多る諸侯大は怒く
 天子とて諸侯を歡し何と王位をかんと罵て敵をかくの以て
 諸侯きりけり極は諸侯をたればとて謀てゆきけ廢極極よ
 不志の以て之をなく前のお后申氏の言申候も極をたすけり
 ゆめて申お后廢せしき城の内にわり極極は因申候候て
 亡さんとあふあも申候大は發兵かく防ごかなく其國西夷の

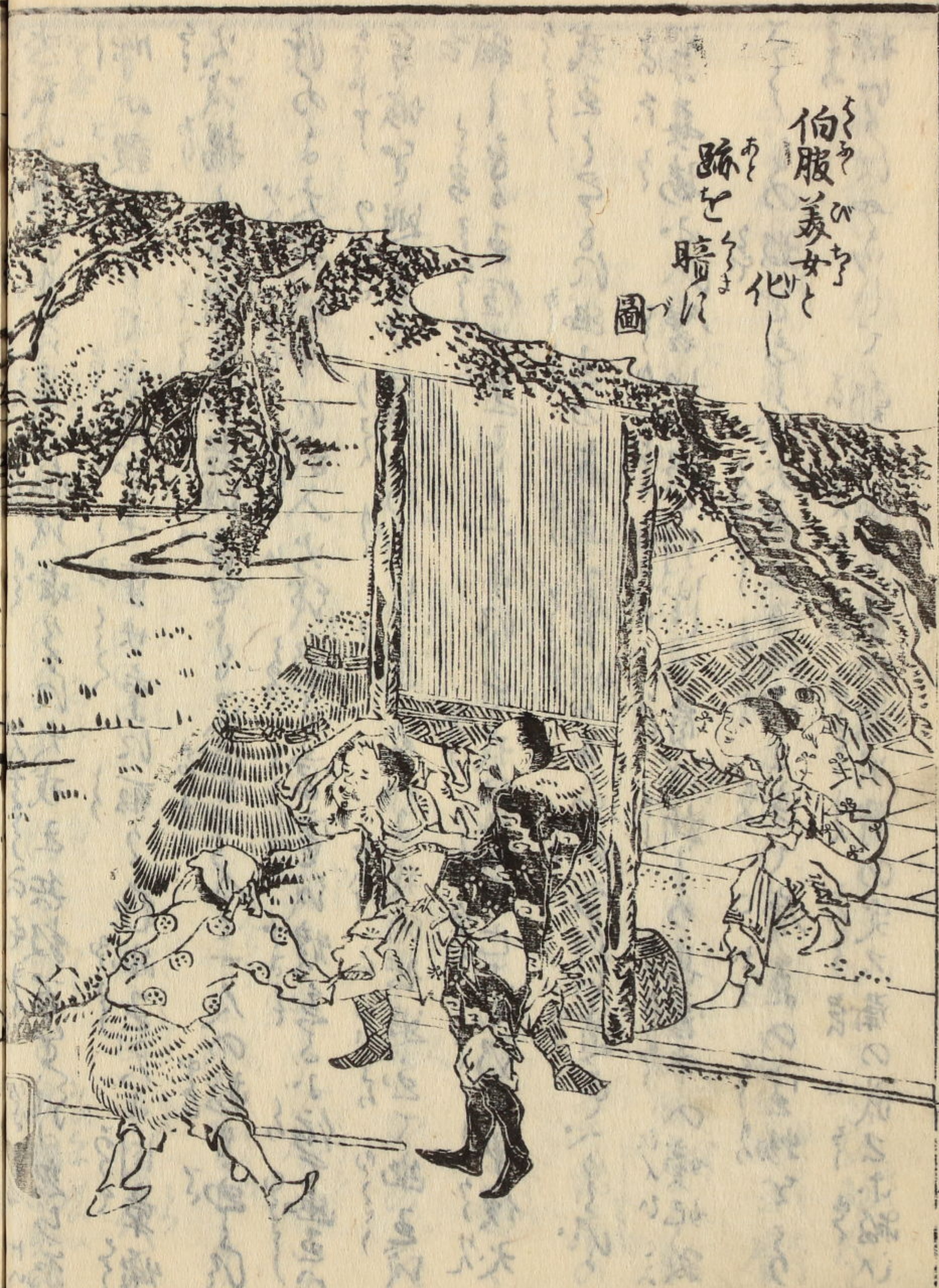
大戎小迫けき六是極城取るに大戎王兵殺百を引忽ら系
 昨小殺毒して宮城を十重女重に取るとむ幽王大は同章極
 火城揚りの諸侯の兵取るも又歡あんと一人の殺もあは
 けのよ大戎城中の乱入火城極宮室火燒き小位て幽王の
 宮城を逃るに驪山の下に手つるよは戎の兵逃てて幽王は
 殺しも五位をたし十一年にて戎の爲とるに申候大
 戎王とてこの幽王の無道ハ廢極があてたれば遂てばうけ
 聖皇極小入廢極とて授け引定て首級斬りの其宮中の嬪妃殺
 ころその殺をたすけ大戎王を城中をてて庫裏の宝物をり
 採りけりして鄭の桓公秦の襄公晋の文公衛の武公小殺い



三國大將傳中宮兩卷之三

六

書本合刊

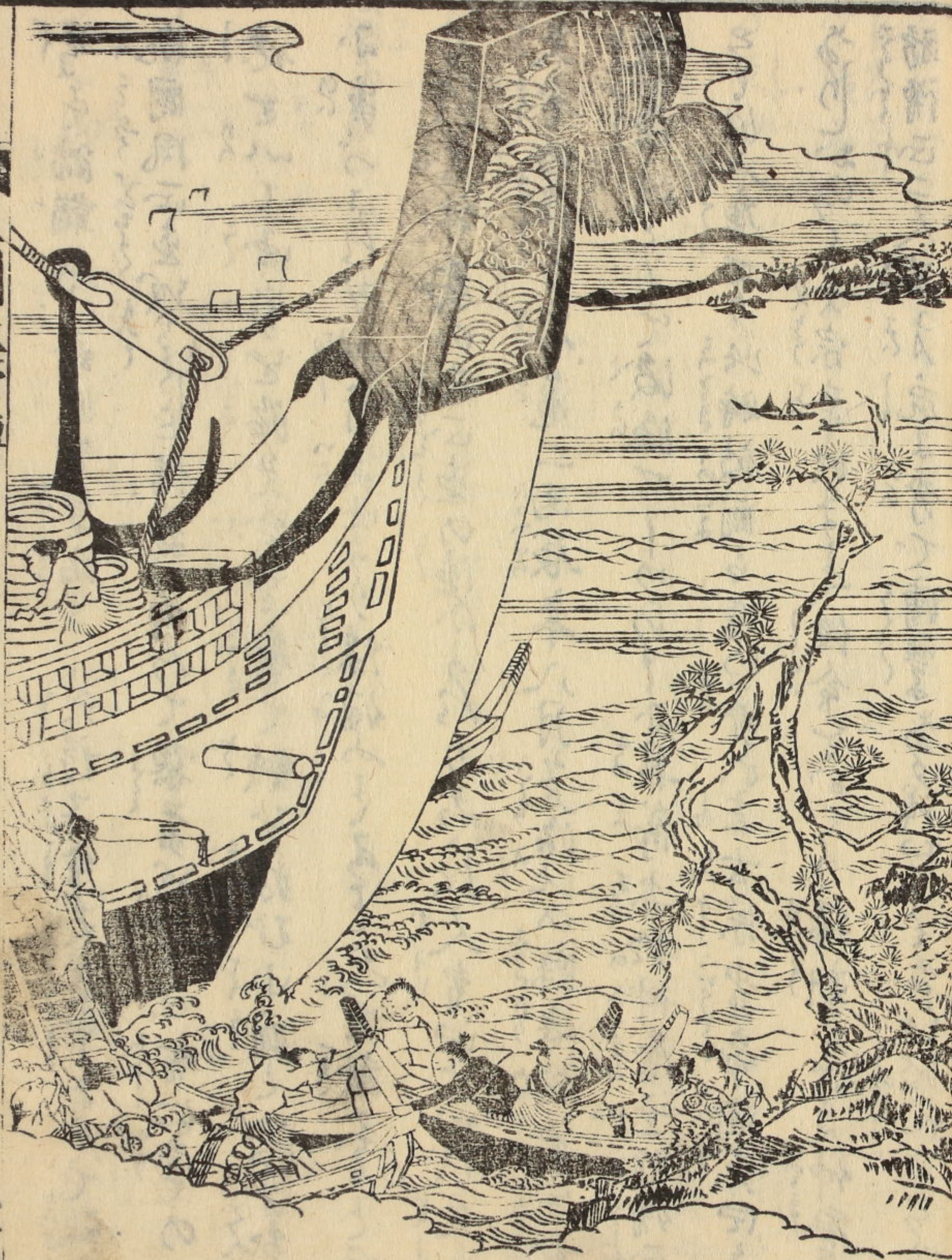


伯服美女と
跡を暗に
圖

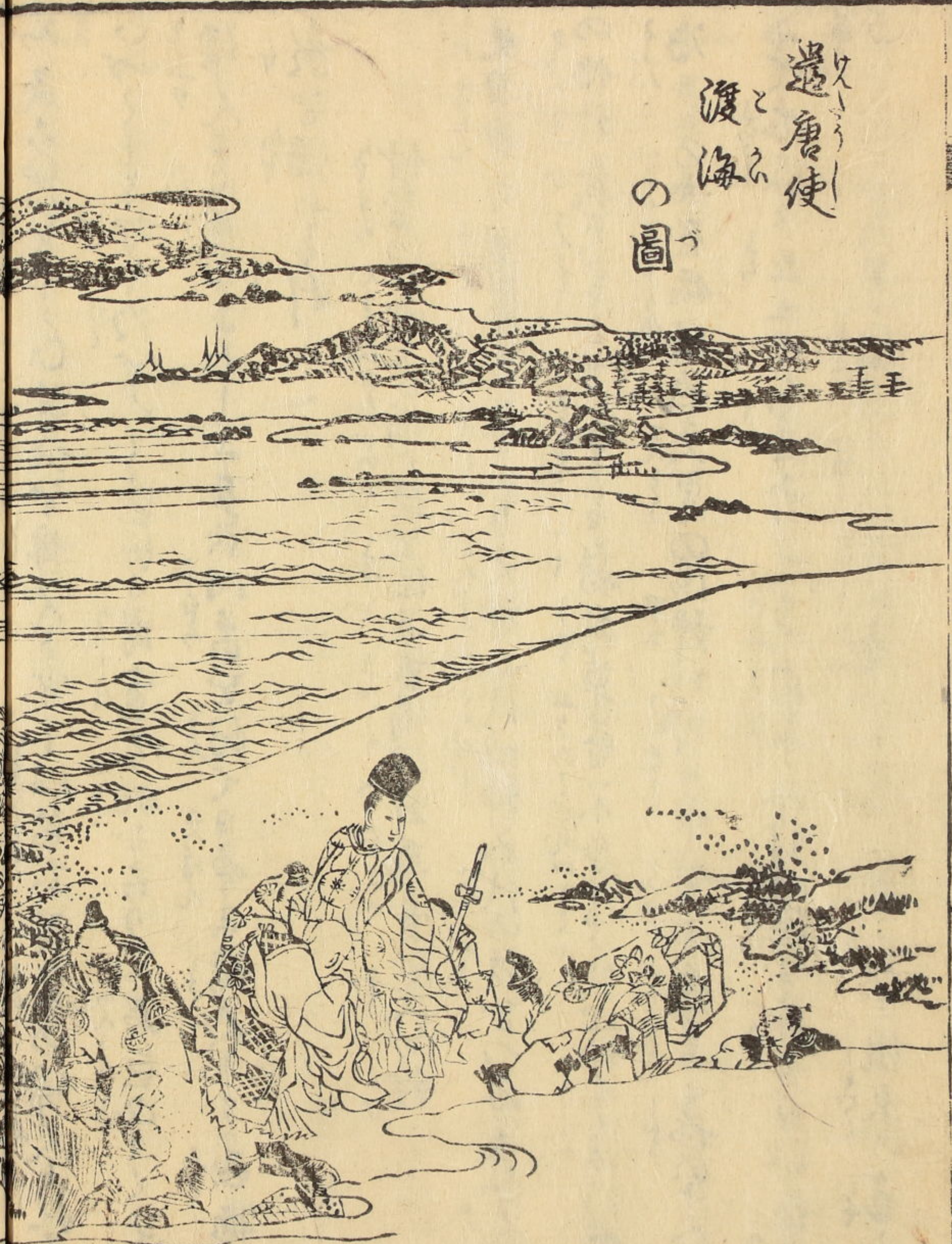
三國大將傳中宮兩卷之三

七

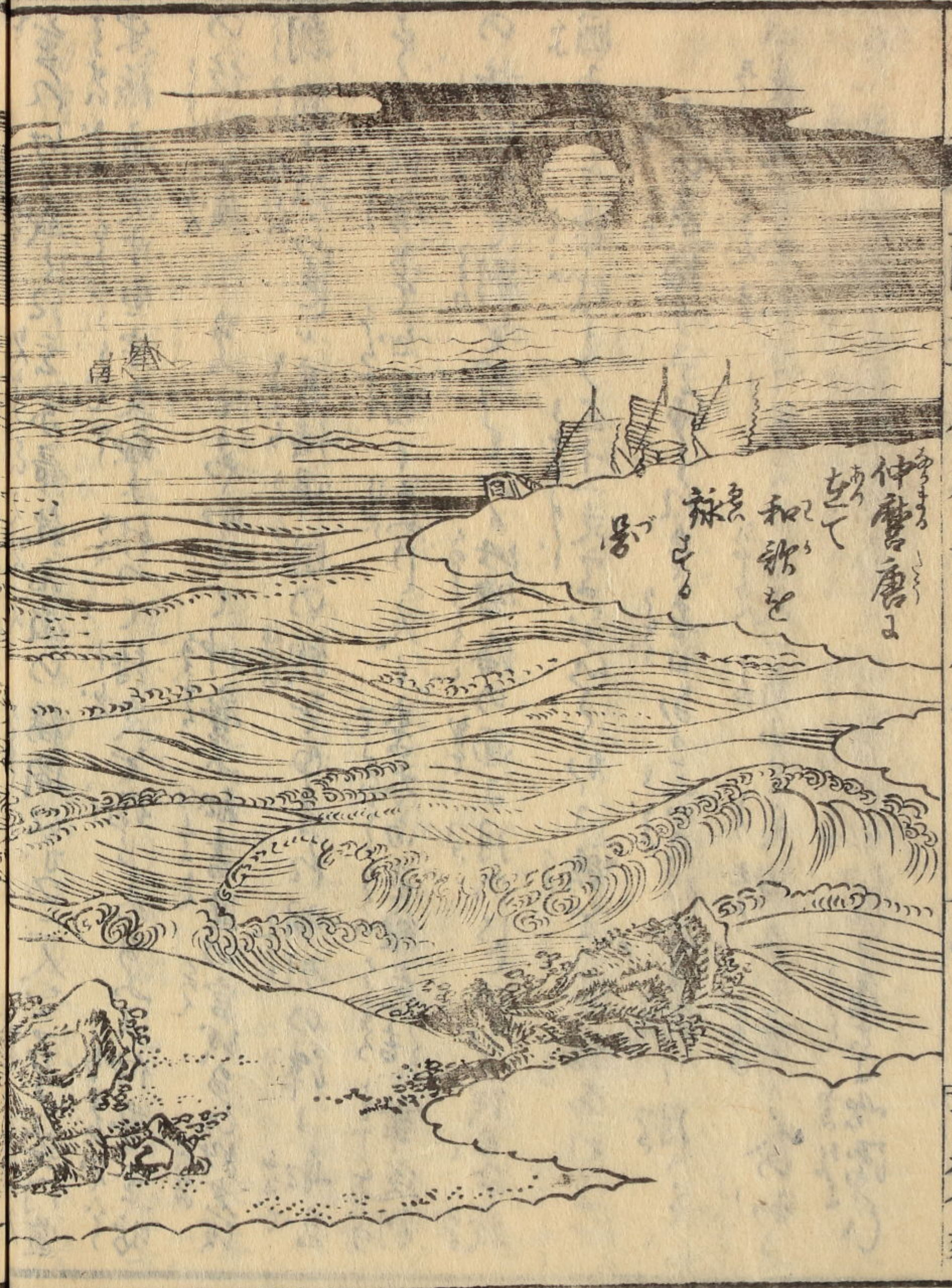
書本合刊

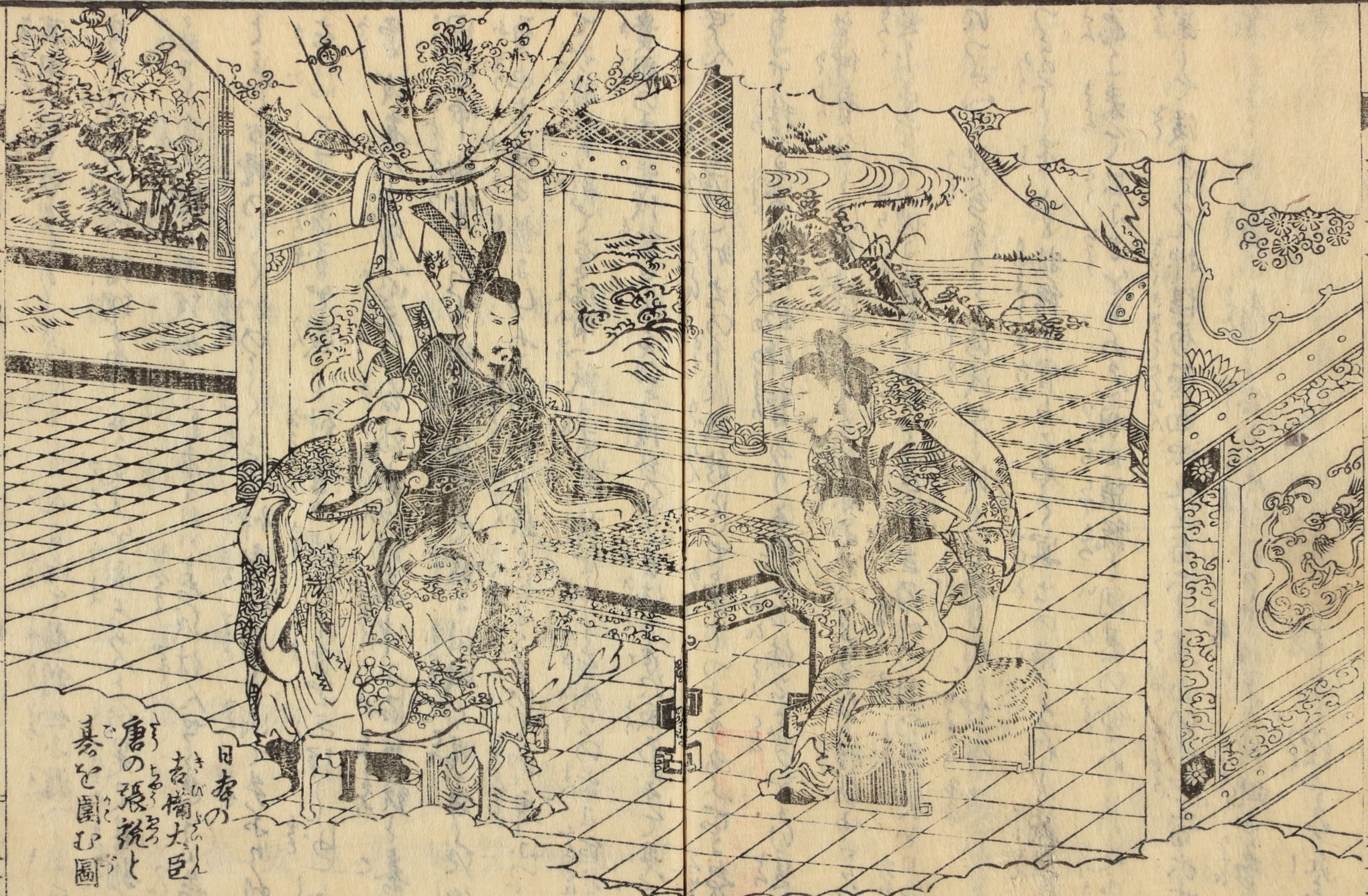


遣唐使
と
渡海
の
圖



馬を踏躡五十鈴姫を皇后（天授子命）天智天皇命（天智天皇）を以て改を
純國風正を以て信義以りて黎首領等と智仁勇の三
徳を以て世家を治先武を廢て賊を誅む小國としてを
小齊ぶればが徳者又是より徳のたとふとて其歌を
たは是神武の正を以て徳小なりあらん人言曰く代元正
天智の法字を龜二丙辰年八月多治比の縣守荻原守命と
遣唐使として渡海せしめらるる其節安部仲麻呂（仲麻呂）と
ともに入唐せり此時彼國を唐の第六主玄宗皇帝開元四年
ありしかの玄宗帝にまゝ使命をおくり帰朝しけるが仲麻呂
勝僧正二人其才亮は秀で博學ありて彼地より來
せりける我々玄宗帝乾元殿の樓閣に於て二人を召して其門監
宋臨濟史中丞宇文融（宇文融）と侍文を以て仲麻呂と勝僧正
の位位を感しまゝとわが如く仲麻呂（仲麻呂）秘書監の官にありて
朝衛と改らば其後帰國の願をゆるされ明州の津に船出
せしめ唐を以て易く交りし人々李太白（李白）王維（王維）包佶（包佶）輩送別
の詩を以て別を以てける此時海の面は月の下にのち月見を我
國を以て神代より三十一文字を以てける歌をこそ詠あれと
天の原ゆりさゆられを春日あるに蓋れしや一月
け秀歌古今和歌集より百人一首ありて撰多し常々人の知
るべし物に海と風波ありて仲麻呂の船はく唐より吹渡り



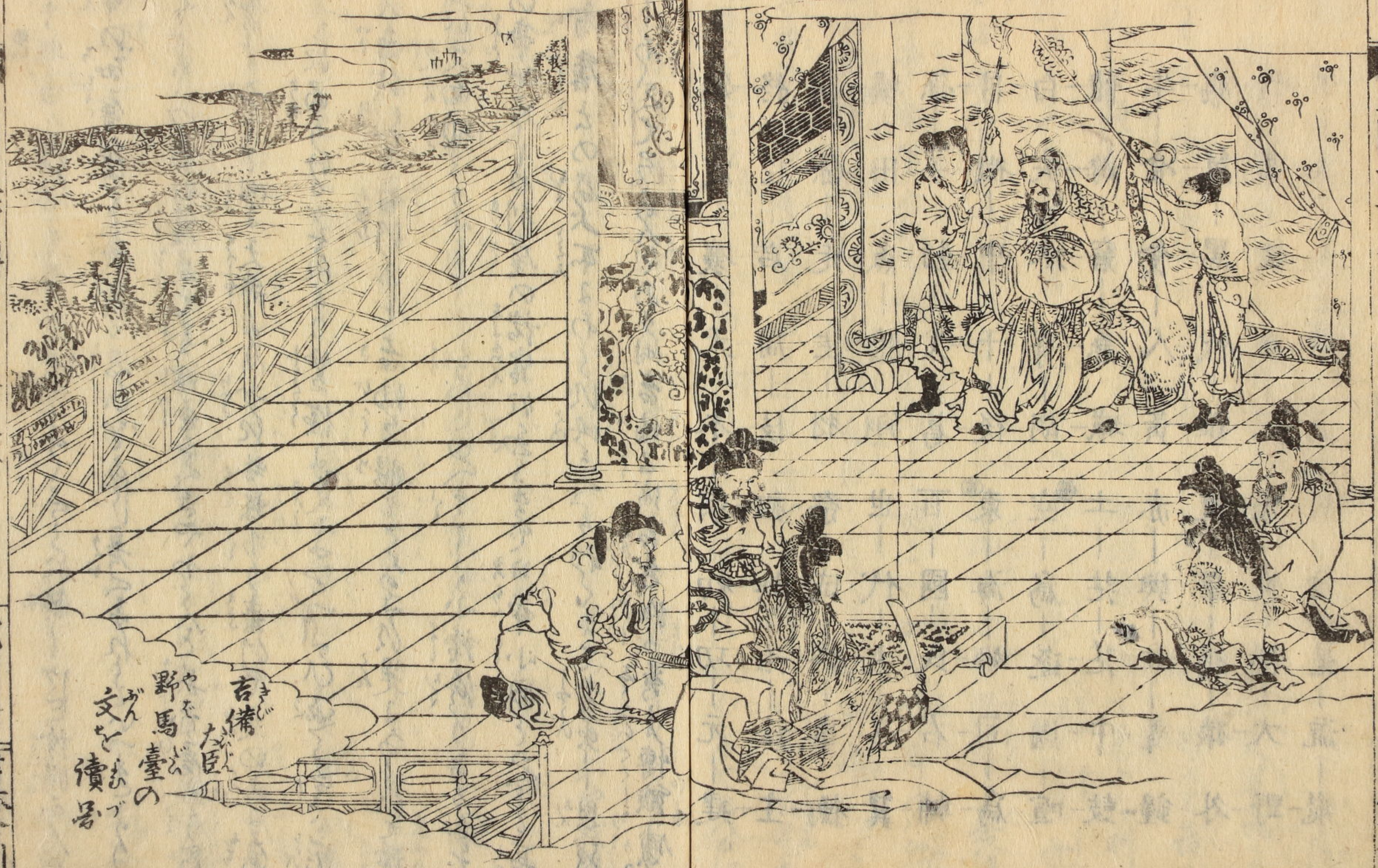


日春の
 吉備大臣
 唐の張統と
 其を圍む圖

其術ハ如クノドクアリ
 野馬春の待紙あり先文才を困志あり
 是又其朝
 文の繕く西紙知しむ
 仲誓の深も滑て矢ふり利
 吉油の其多事と感し仲誓の消し
 方望三孫也也
 常汝安人ドの
 國セ帝殿覽われも
 諸官列座して
 誠目映く
 暇も
 負也吉油の盤
 盤はひよ
 贈利自然と
 乞はるる
 即席ふつ
 てお勝けり
 李林甫一紙
 書せ
 待を出し
 吉備公の
 前
 貴國の未
 来
 成
 終
 世
 一
 之
 讀
 め
 人
 や
 と
 吉
 備
 公
 の
 前
 へ
 取
 ら
 れ
 て
 見
 ら
 れ
 ぬ

始	定	壤	天	本	宗	初	功	元	建
終	臣	君	周	枝	祖	興	治	法	主
谷	孫	走	生	羽	祭	成	終	事	衡
填	田	魚	膾	翔	世	代	天	工	翼
孫	子	動	戈	葛	百	國	氏	右	輔
昌	微	中	干	後	東	海	姪	司	爲
白	失	水	寄	胡	空	爲	遂	國	喧
龍	游	窘	急	城	土	茫	茫	中	鼓
牛	食	食	人	黃	赤	與	丘	清	鐘
腸	鼠	黑	代	雞	流	畢	竭	猿	外
丹	盡	後	在	三	王	英	稱	犬	野
水	流	天	命	公	百	雄	星	流	飛

三國志 魏書 卷之三十一 魏書 卷之三十一 魏書 卷之三十一



吉備
大臣
野馬臺の
文を讀む

字々明白の辨も句讀毎へくくして解しはば續得らんが
 日本あちんの恥辱ありと幾度か思ひをあらじ考へあれといつさるり
 儘どめいつまに續得て義理をどぶさやわんと其首尾もこれ
 必事一々いつまに天井あり少に跡跡り来りて文の上は
 かくこれ前りけりがそれより惣括り文字をいつひ返る字は
 見え系流して告げぬを古傳を眼もその是はありて續
 ろに文面明くふもくくは思へるも不續流りありしを
 唐の帝とてめ別産の諸官にわすれ日本小國とて其
 方智唐土の乃ど下よわくは此うくわくまで當り一思
 施しわえてるめんとわすれ古傳を成るは汝が秀才博識
 ふうに傳わり仲慶海に學友ハ日本中も希おんと字い
 ちれば古傳を權でやあつ小官あ人を憎く學ぶが富ふや我國
 ちて入唐使を命せらるは是も其も學び熱してゆれせん
 と此國を頼めし學問の未熟あり紙使しめあふこと益は
 唐の帝いよく傳へるも唐の諸官學問はは才あり日本
 お又下さる人へ沙をありと古傳の公中おと和て面人知
 止るいしとわ實は英智の一言を君命を和しめは後の代も
 稱するなり時續せあひし文を梁の代は宣徳和尚と云碩徳博
 識の僧あり也多小いづきより日毎は天童へ入るもしく来り
 一字づ書して去る事一百二十日は一百二十章来りて一百二十字

一字づ書して去る事一百二十日は一百二十章来りて一百二十字

書一其後... 日本... 明く不...
書一其後... 日本... 明く不...
書一其後... 日本... 明く不...

私云仲... 世人... 刊行... 續日本紀...
私云仲... 世人... 刊行... 續日本紀...

繪本三國妖婦傳中巻之三

